

留学生別科におけるプレゼンテーション授業の試み

桑原 直子

倉敷芸術科学大学留学生別科

(2016年10月1日 受理)

はじめに

本稿は2015年度に倉敷芸術科学大学留学生別科で行ったプレゼンテーション授業について報告するものである。本学留学生別科の初級クラスから中級クラスに在籍するすべての学生がパワーポイントを作成しそれをもとに発表するという過程を通し、日本語能力、表現力、聞く力及び異文化理解等の力を総合的に習得することを目標に置いた授業づくりを考察する。

1. 留学生別科の現状

倉敷芸術科学大学留学生別科では母国にてN5レベル以上の日本語を習得した学生を受け入れ、大学進学に向けてより高度な日本語の習得を目標に日本語教育を行っている。

2015年度は、中国、スリランカ、パキスタン、マレーシア、ベトナムからの留学生が在籍し、開講科目は、文型・文法、読解、聴解、作文、会話、漢字語彙、試験対策であった。その中で、会話授業は、前期：1週間に1コマ(90分)×15回、後期：1週間に1コマ(90分)×15回行われた。通常、会話の授業では、その週に学習した文型や語彙をもとに主に日常会話をいかに円滑に進めるかに重きを置いた練習を行っている。しかし、現在大学の授業、ゼミや卒論等でパワーポイントを使ったプレゼンテーションを行うことが必須となってきており、留学生別科を修了した学生が大学に進学する現状を踏まえ、大学進学の子備教育機関である留学生別科において、日常会話とはまた違う表現形態の学習としての位置づけでの表現学習が必要であると考え、後期会話授業を中心にプレゼンテーションに取り組むこととなった。

2. プレゼンテーションの目的

今回のプレゼンテーション授業を行う上で学生に示した目標は以下の点である。

- ①基礎日本語能力の向上：文法や語彙を正しく使うことができる。
- ②日本語読解能力の向上：プレゼン資料を作るために自分たちが必要な情報を読み、理解することができる。
- ③日本語表現能力の向上：資料をまとめ文章化できる。自分の表現で口頭発表できる。
- ④聞く力：他のグループの発表を聞き、内容を理解することができる。

- ⑤異文化理解：他のグループの発表を聞き、自己とは異なる文化に気づくことができる。

以上の点を考慮して、今回、初級クラスには「私の国」、初中級クラスには「私の生活」、中級クラスには「私と日本」という大きなテーマを与えた。これらのテーマに基づき、プレゼンテーションのための作文やパワーポイントの作成を進めていくことで既習文型や語彙の運用強化を図り、またお互いの発表を耳にすることで文化的側面に気づきを与えることができるのではないかと考えたからである。そして、この試みは川口（2004）の「個人化」という考え方に基づき行った。

2-1 「個人化」

川口（2004）では、言語学習における「個人化」とは、表現主体本人が自分について表現することであり、表現を「個人化」することで、学習者は自分にとって意味のある文脈を自分の責任で作ろうとすると言っている。自らについて考え、それを自ら表現することで、学習者は目標言語の運用能力を高めていくのである。

また、川口（2011）には、「自分にとって真実で有意義で、重要なことが何か、それを自分自身で考え、まず自分について表現して、目標言語で交換しあう『リアルコミュニケーション（縫部 2001）』が自己開示と他者理解を促す」とある。ここからは、「個人化」、すなわち、自分について考えたことを表現することで、目標言語を使おうとする心を開き、それが他者理解へもつながっていくことが読み取れる。

本活動において、初級クラス、初中級クラスには「個人化」した作文を書くことを第1の目標に掲げ、学習者にとって意味のある言語の産出を求めた。そして、「個人化」作文を正確に伝えることを念頭に書くことで、既述したプレゼンテーションの目的①の達成が、また、「個人化」された文章を暗記し発表する、すなわち他に開かれた情報を提供するという部分では、プレゼンテーション目標の④⑤が達成できると考えた。

2-2 「表現できない」への気づき

稲葉（2011）では、Swain（1993, 1995）を取り上げ、「言語を算出することで、第2言語学習者は自分が第2言語でどのようなことが表現できないかに気づく機会を得る。この気づきがさらなるインプットへの注意を喚起するきっかけになる」と述べている。近年の日本語教育では、インターアクションを多く用いたコミュニケーションアプローチが叫ばれ、またアクティブラーニングなど、学習者主体に進める学習活動も教室内でさかんに用いられるようになってきている。こうした中で、学習者は、会話や作文の授業を通し、日本語という言語を使い、自分の思いや意見を産出する機会を得る。

前述した「個人化」という活動は、「自分について語る」活動である。「自分について語

る」という点のみを切り取って考えてみると、本学留学生別科で行っている現行の会話授業では、学校生活、家族のことなど、本人の身近な話題に焦点があてられることが多く、まさに「個人化」はされているものの、繰り返し日本語で語っているテーマであるため、使用語彙や文法も同じものに限られ、なかなか新しい表現や語彙を使おうとしないのが現状である。

そこで、今回は「表現できない」ならばもっとインプットを増やしていこう、という指導を行うことにも重きを置くこととした。具体的には、彼らがまだ知らない日本について調べ、日本人にインタビューし今まで耳や目にしなかった情報に触れ、それをまとめ、発表することで、彼らが今まで「表現できなかったこと」を「表現できる」形に持って行くことに焦点を当てたのである。既述したプレゼンテーションの目的②③にあたる。

3. 授業の概要

3-1 事前学習

プレゼンテーションを行うにあたり、事前の学習指導を行った。事前学習の内容は、プレゼンテーションまでの大まかな流れ、テーマの発表、グループ分け、インタビューの仕方、パワーポイントの作成方法などであり、以下をプレゼンテーション授業での留意点とした。

- (a) インターネットの情報等をそのままコピーして使うのではなく、必ず自分の言葉で伝えること。
- (b) プレゼンテーションは各グループ5分程度に収めること。
- (c) パワーポイントを作成する時には、文字はキーワードのみを配置し、聴衆をみながら発表が行えるように準備すること（内容の暗記）。
- (d) 日本人にインタビューを行う際、丁寧な表現を使うこと。

3-2 グループ活動

今回のプレゼンテーションはグループ活動とした。1グループに国籍の同じ学生3~4人を配置した。国籍を同じにした理由は、各自の国について紹介することで、より彼らの「個人化」された表現を引き出すことにある。

3-3 授業の流れ

- ①一通りの事前学習を終えた学生は、グループに分かれ、まずマッピングを行い、各グループの発表内容についての大枠を作成。
- ②パワーポイントに使用する画像を決め、それぞれの画像にふさわしい発表原稿を考える。発表原稿を考える際には、なるべく自分が経験したことや各自の思いを含めるよう指導を行った。

- ③日本人学生や職員へのインタビュー調査。今回の発表原稿作成に関し、日本人とのインターアクションを加える意味で、日本人へのインタビューを全員に課した。各自が調べた内容について、日本人はどのくらいの知識があるのか、あるいはどう思うかなど、インタビュー項目をそれぞれが決め、インタビューを行った。
- ④パワーポイント及び発表原稿が完成した時点で、教師の前で発表し、時間や語彙、文法、発表内容、パワーポイントのチェックを行った。
- ⑤指摘された点を直す作業
- ⑥発表内容の暗記
- ⑦最終チェック（原稿を見ずに発表できるまで、何度も繰り返した。）

3-4 プレゼンテーションのテーマ

初級クラス「私の国」、初中級クラス「私の生活」、中級クラス「私と日本」という大きなテーマを掲げた中で、学生はグループごとに以下のようなプレゼンテーションのテーマを設定した。

【初級クラス（4グループ）】

- グループ 1： スリランカの世界遺産・地域・食べ物
- グループ 2： パキスタンの食べ物・祭り・有名な所
- グループ 3： パキスタンの人口・言語 ネパールの人口・言語・町
- グループ 4： スリランカの言語・宗教

【初中級クラス A（4グループ）】

- グループ 5： 大学の紹介
- グループ 6： 休みの過ごし方
- グループ 7： 別科の校外学習
- グループ 8： 別科の生活紹介

【初中級クラス B（3グループ）】

- グループ 9： 岡山について
- グループ 10： 連島について
- グループ 11： 倉敷について

【中級クラス（3グループ）】

- グループ 12： 日本のスーパー
- グループ 13： 日本の限定商品

グループ 14： 日本のお正月

3-5 プレゼンテーションと評価

プレゼンテーションはプロジェクターに投影したパワーポイントを用いながら、スライドに沿って各自が暗記した内容を発表していった。評価のポイントとしては以下を挙げた。

- (a) 聴衆をみながら発表をする。その際アイコンタクトを取るよう心掛ける。
- (b) 声の大きさ、発音に気を付ける。
- (c) 制限時間を守る。
- (d) 発表内容（自分の意見や思いが反映されているか）

4. 考察

4-1 個人化

今回のプレゼンテーションでは「個人化」というキーワードを掲げ、学生の「個」という部分に一步踏み込んだ表現活動にすることで、日本語運用能力の更なる向上を試みた。縫部（1991）では、「個人化作文とは自分が何者かを知り、他者と経験を分かち合うことにより成長し、自己の価値を発見し、その価値を生活の中に反映させるすべを知ること」と述べられている。プレゼンテーション作成過程で、各自の出身国や、国での経験、日本での生活、所属する大学や地域に目を向け、グループで話し合いながら内容を考えていった折、まさに、学生は縫部の言う「自分とは何者かを知り」「他者と経験を分かち合う」ことを経験した。そこから生まれた作文を覚え、聴衆の前で表現することで、彼らは日本語でインターアクションを行うことに意味を見出し、聴衆のうなずきを得ることで、自身の日本語運用能力の向上を確信することができた。このことは、プレゼンテーション後に書いた感想の中からうかがうことができる。

【学生A】 今回の発表で、日本語を覚えて、みんなの前で発表して、日本語をわかってもらえたので、とてもうれしかったです。

【学生B】 文章を覚えるのは難しかったけれど、国のことを、いろいろ話すことができてよかったです。

【学生C】 今まで、自分の国のことをうまく日本語で説明できなかったけれど、これからは、話すことができますと思います。

日ごろどうしても教室外では国籍を同じくする学習者同士で集まり、母語を使ったコミュニケーションから抜け出せないでいる学生にとって、「個人化」に焦点を当てた表現活動で、自国や、自分の生活、または自分と日本とのかかわりについて目標言語で考える

ことで、よりそれらへの考えを深め、またその考えを発信することで他者理解を深めていくことができた。

4-2 聞く力

プレゼンテーション授業では、どうしても発表原稿の作成過程、その内容、発表者の発音等に焦点があたるが、実は聴衆となる学生の聞く力を養うという点も大きな学びの一つに挙げられる。

Dunkel (1986) では、学習者が身につけるべき聴解ストラテジーとして、(1) 内容を予想し予期する、(2) 自分の予測したことと実際の発話の内容の差をモニターする、(3) 理解に必要、不必要な情報を取り捨て選択する、(4) 自分が理解したことが正しいか否かを確認する、という4つを挙げている。今回、他者のプレゼンテーションを聞くにあたり、聴衆となった学生は、プロジェクターに写しだされる画像を見ながら話の内容を予測、モニター、情報の確認を行い、時にわからない語彙に出会った際には聞き流し、大まかな情報を取り込むという聴解のストラテジーを駆使していた様子が以下の感想から読み取れる。

【学生D】時々わからない言葉があったけれど、写真があったので、だいたいわかった。

【学生E】写真をみて発表を聞いたので、たぶんただしく理解できたと思う。

【学生F】時々難しい言葉があった。難しい言葉は調べる時間がなかったから、そのまま聞いた。画像があるとわかりやすい。

また、河内 (2012) では「他の学習者からの学び」として、学習者は興味の対象や年齢の離れた教師からよりは、むしろ興味の対象、年齢の近いクラスメートからこそ多くを学ぶ可能性を述べている。そして、「クラスメートの発表を聞いて、自分とさほど英語力や人生経験は変わらないはずなのになぜうまく聞こえるのか、あるいはなぜあまり効果的な発表ではないと感じられるのかを分析し、その気づきをみずからの発表に活かすことができる」としている。今回プレゼンテーションの聴衆となった本学の学生も、大いに他の学習者から学んだはずである。だが、今回プレゼンテーション後に「クラスメートの発表を聞いて気づいたこと」をまとめる時間を取っていなかったために、どのような学びがあったかは、ここでは述べることができない。発音や表現の仕方など、他者の発表から得る気づきをまとめ、その気づきをどのように自分の力としていくかを明らかにすることは、今後の聴解や口頭表現活動の向上に大きく関わると考えられるため、「聞くことの気づきのまとめ」は今後の課題として、プレゼンテーション後の学習に取り入れていかなければならない点である。

4-3 クラスのグループダイナミクス

河内（2012）では、Dörnyei&Murphey（2003）に言及し、学習者同士が互いに互いのことをよく知ることにより、学習者間の関係性が増し、学習者の共同体としての団結力が高まり、学習者の動機の向上につながることを述べている。そして、「プレゼンテーションを通じて学生同士が互いに理解を深めることができればクラス全体のグループ・ダイナミクスに好影響を及ぼし、ペアワークやグループワークで行う言語活動もよりスムーズかつ効果的に行われるのではないか」と続けている。

今回プレゼンテーションをグループ活動としたことで、学生は互いの意見に耳を傾けることが必須となり、作成、構成、練習と活動を繰り返していくうちに、学習者間の絆は確かに深まっていった。また、個人化した発表を聞くことで、聴衆となった学生はクラスメートからもたらされた新しい情報（他の国の世界遺産、食べ物、宗教など）を自分の知識とすることができ、それはその後のクラス活動や、日ごろの学生同士の会話を深めることにつながった。そして、グループ間の学生のつながりと、発表者と聴衆としての学生同士の関係の深まりにより、クラス、ひいては留学生別科全体の共同体としての意識の向上につながっていく様子がみられた。このような効果の元、学習者は「目標言語で自尊感情、自己受容、他者受容を発達させ、不安感を減少させて目標言語を使うことに自信を深める」（縫部 2001）環境を作りあげることができたように思われる。

半面今回の反省点は、グループ学習において、メンバーを同一国籍にまとめたことで、原稿作成過程の言語がどうしても学習者の母語になりがちであったことである。母語を使って議論を深めた点では確かに学習者間の関係性の深まりをみることはできたが、日本語学習という観点からは、今後改善していかなければならない。やはり、目標言語の運用能力向上を目指すにあたり、日本語でのインターアクションに持っていくことは必要である。

4-4 異文化理解

プレゼンテーション後、次のような感想がみられた。

【学生G】ほかの国の宗教や、有名な場所のことがよくわかった。

【学生H】イスラム教のお祭りのことは全然知らなかったけれど、発表を聞いて少しわかった。

【学生I】伝統的な衣装がいろいろ違っておもしろかった。

【学生J】いろいろな文字があった。

これらは、クラスメートが個人化した発表を聞き、自分の知らない文化・習慣に出会い、自分との違いに気づいたことを示している。文化・習慣というものは、目に見えない

ものであり、その理解はなかなか難しい。教科書や読解教材で教師がステレオタイプな文化を教え込んでも、自分の「気づき」なしには、理解までには至らない。そういった意味で、今回聴衆となった学生達が、他者の発表を聞いて、上記に述べたような違いに自ら気づいたことは、大きな収穫であったと考える。しかし、違いに気づくことにとどまらず、今後彼らがその違いに興味を持ち、他の文化・習慣について調べたり、話を聞いたりして、自ら考えを深めていってこそ、はじめて新の異文化理解へとつながっていくと思われる。そのため、プレゼンテーション後にこの部分をどう伸ばしていくかは、今後の課題として挙げられる。

5. おわりに

今回のプレゼンテーション授業を通し、授業として設定していた5つの目標は、ある程度達成することができた。そして、留学生の日本語運用能力の向上を目指し行ったプレゼンテーション授業であったが、言語学習を超え、グループダイナミクスや異文化理解の点までの学習成果を得ることができた。

しかしながら、聞く活動としての気づきのまとめ、学習者間の言語使用や、プレゼンテーション後のフィードバック及び学習の深めという点では今後の課題も生まれた。

また、今回は個人化した文章、特に自国の文化・習慣、世界遺産、自分たちの生活を他者に伝えることに焦点を置いてプレゼンテーションを行った。しかしながら、九州大学大学院言語文化研究院（2010）において、情報提供のプレゼンテーションとは「情報提供は、聴衆が知らないこと、誤解していることについて、正確な情報を伝達することにある」とされているように、「知らないこと」「誤解していること」に対しての適切な情報提供こそ非常に大切な点である。今回のプレゼンテーション授業では、事前に聴衆が例えば自国の何を知らないのか、自国の文化においてどんな誤解があるのかなどを調査せず、すぐに内容作成のマッピングに入った。より聴衆の理解を呼ぶプレゼンテーションにするために、今後は聴衆が知らないこと、誤解していること等の事前調査を入れることも課題である。

参考文献

- 川口義一（2004）「表現教育と文法指導の融合—「働きかける表現」と「語る表現」から見た初級文法—」『ジャーナル CAJLE』6号
- 川口義一（2011）「初級日本語教室における日本語能力」『早稲田日本語研究』11号
- 縫部義憲（2001）『日本語教師のための外国語教育学』風間書房
- 稲葉みどり（2011）「アウトプット重視の日本語授業の構想創り —自己紹介のプレゼンテーション作成と発表」愛知教育大学日本語教育講座
- 縫部義憲（1991）『日本語教育入門』総拓社
- Dunkel, P. A. (1986). "Developing Listening Fluency in L2: Theoretical Principles and Pedagogical Considerations". *The Modern Language Journal*.

- 河内智子（2012）「学生によるプレゼンテーションをリスニングの授業に導入する意義」『成蹊大学紀要』
- 九州大学大学院言語文化研究院（2010）「大学生の外国語プレゼンテーション入門 ―基本スキルと8カ国語表現集」〈<http://133.5.23.59/presentation/materials/index.php>〉

Practical Report of a Presentation class in IJLP

Naoko KUWAHARA

Intensive Japanese Language Program

Kurashiki University of Science and the Arts,

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan

(Received October 1, 2016)

In this paper, I discuss my presentation class in the Intensive Japanese Language Program at Kurashiki University of Science and the Arts in 2015.

First, I explain the aim of the presentation class and how I set it up. As it is my belief, that when studying a foreign language it is important for the students to express what is going on inside themselves for them to understand each other, therefore: “personalization” is the main theme throughout the semester.

In sum, while acknowledging several points that can be improved, the presentation class boosted individual students’ language ability, listening skills and cross-cultural understanding.